

## 千眼万慮

九月に日中交正常化五十周年を迎える。このドンピシャのタイミングで池田知隆著「謀略の影法師・日中交正常化の黒幕・小日向白朗の生涯」(宝島社)が八月初めに出版された。

馬賊王「小日向」が大正、昭和前期に、満洲(中國東北部)などで約三十一年にわたって暗躍した歴史秘話はよく知られていない。本書では一九五〇年に帰国した小日向が、一九六〇~七〇年代のアジア動乱を終息させるため

に米国・キッシンジャー特使が米中会談を実現し(七一年七月)、田中角栄首相が日中交正常化(七一年九月)した。その裏面で秘密工作をして暗躍した事実を初めて明らかにした。

新潟県出身の小日向白

朗(一九〇〇年一月)、八

脚光を浴びた。

「中国の赤い星」の著者エドガー・スノーは、「米中国交回復の扉を開けるのは、世界でただ一

として活躍、中国の伝説の英雄「小白竜」と呼ばれ、「中国本土の總頭目(部下約七万人)」にまでの

し上げた。英国からは「アラビアのロレンス」とも呼ばれた。小白竜の名は中国全土にとどまらず、蒋介石、毛沢東とは蒋さん、毛さんと呼び合う仲までになっていた。

ところで、米国は一九六〇年代末にベトナム戦争が泥沼化していく中で

戦争終結の道を模索して同時に北京政府にも「ベトナム和平」「ポストペトナム」「中国問題」「アジアの建設」の四項目か

らなる同一の提言を提出し、米中間の仲介役を引き受けた。この提言書は

同書に全文、資料として掲載されている。

馬賊王の隠密裏の渡米は、当然、パスポートに記録は残されていない。

日本国内の米軍基地から軍用機でアメリカに渡つた。数多くのアメリカの諜報機関の要員が、日本でフリー・パスで活動でき

るのは、国内の米軍基地に招請状が届いた。

## 馬賊・小日向白朗――

老学 不朽

馬賊・小日向白朗――

蒙古など中国の荒野は、中世時代の暗黒の中に閉じ込められた農民たちが生活しており、周辺民族の韃靼人(だつたん)、契丹人(きつたん)の侵略を防ぐためにできた農民の自衛組織が「馬賊」である。それが日露戦争ころから、日本やロシアの間に情報収集役や、後方にから乱に利用されるようになって軍国主義の手先となつた」と指摘、「眞の馬賊は、義に堅く情に厚い、義士、烈士であり、前漢の高祖・劉邦、太平天国の洪秀全も、毛沢東も、この眞の馬賊の一種であった」とも書いている。

つまり、十九一二十世纪の日中英米の対立、紛争、戦争は「古代からの中華思想」対「近代西洋思想」、対「近代日本天皇主義思想」との三つどもえの戦いだったといえ

よう。

ところどころは明治維新(一八六八年)から百五十四年目に当たり、日本興亡史のサイクル(七十七年間)の二度目

の課題、田中首相の日

本の文化の前途に対し

て、西洋の霸道の番犬となるのか、東洋の王道の干城(かんじょう)国家を防ぎ守る軍人となるのか、日本国民がよく考え、慎重に選んでほしい」と忠告した。

しかし、その後の日本は「西洋の霸道の番犬」となつて中国大陆を侵略し突き進み、日中戦争、太平洋戦争で敗戦・亡國した。

五年に一度の中国共産党幹部人事を決める共産党大会が今年十一月に開催予定で、習近平総書記の三期目入りが確実視されている。「強中國夢

(中華思想・霸權主義)を目標とするが、習近平主席はこの孫文の「霸道」か「王道」の警告をどう受け止め

るのか。日本と同じ軌

年十一月に、神戸を訪問した。習近平主席はこの孫文の「霸道」か「王道」の警告をどう受け止めている。同時に、アジアの霸道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質も持つことを踏むのではないかと氣になる。(評論家)